



監督=ジェームズ・アイヴォリー／出演=ナオミ・ワッツ／ケイト・ハドソン (20世紀フォックス映画配給／2003年アメリカ・フランス合作映画／118分)

舞台はパリ。結婚してパリに住む姉を訪れた妹は、プレイボーイの中年男の口説きにたちまちダウン。ところがこの男は、姉の夫の親戚だった。一方、離婚寸前の姉夫婦は？ アメリカ人の美人姉妹を通してアメリカ VS. フランスをコミカルに描くちょっと変わった合作映画。「出会いはケリーバッグ、別れはスカーフ」というテクニクはちょっと高くつくが、ひょっとして参考になるかも……？

## ♣ 2人の美人姉妹だが……

フランス人男性と結婚してパリに住んでいる姉のロクサーヌ（ナオミ・ワッツ）を訪問したアメリカ娘の妹はイザベル（ケイト・ハドソン）。姉は今妊娠中。そして小さな娘が1人。夫は優しくて幸せな家庭を営んでいるはず、だったが……？ イザベルが姉夫婦の家に着いた時、間の悪いことに、ロクサーヌの夫のシャルル・アンリ（メルヴィル・プポー）は、愛人をつくって家を飛び出していくところ……。スタートからして、フランス人男性とアメリカ人女性の恋愛観・結婚観のすれ違い、食い違いを鮮明に示している。

## ♣ 妹も相当の発展家……？

イザベルはロクサーヌの子供の世話をしつつ、姉の家に同居した。そしてちょうどロクサーヌの知り合いの作家オリヴィア・ペース（グレン・クロウズ）の下で、資料整理の仕事にありついた。ところが、ここでたちまちイザベルがいい仲

になったのが、オリヴィアの仕事を手伝っていた若い男性のイヴ（ロマン・デュリス）。なぜか知らないが、2人はたちまちベッドイン……？

しかしイザベルの本命は、知的で渋い外交官エドガル（ティエリー・レルミット）。もちろん妻がいるが、イザベルと食事しながら、露骨に「恋を楽しもうヨ」と口説き、愛人関係を「提案する」エドガルは、さすが恋のテクニックにかけては世界一(?)のフランス人男性。その迫り方は実にうまいもの。もともとテレビでエドガルの姿を見て魅力を感じていたイザベルはたちまちイチコロ。姉の夫の母の弟だとわかっていながら、たちまち恋（不倫）の虜に……。

恋をすれば変わるのが女。イザベルはたちまち服装から髪型まで、そして下着から△△まで……。フランス男に負けず、アメリカ娘も何とも発展家……？

## 出会いはケリーバッグ別れはスカーフ

エドガルの女性の口説き方は、まずは真っ赤なクロコダイルのケリーバッグのプレゼントから。もちろん本物の最高級品だから200万円(?)はするはず。そして、「ガツガツしない」のがいい。出会いの時から、いつかは別れるものと考えているらしく、お互いの自由をしばらくとしないのがカッコいい（というより都合がいい?）。そして、別れる時に贈るのはスカーフとキマっているとのことだが、これも何となく決まっている……。

この男、53歳だから、俺もちょっと真似てみようかな……？ しかし、大阪のオッサンがこんなフランスのダンディな中年男の真似をしても所詮無理か……？

## 複雑にからむ男女関係

この映画の男女関係はややこしい。

まず第1は、離婚を求めるシャルル・アンリと、あくまでこれを拒否するロクサーヌとの心理戦と財産処理をめぐる争い。第2は、妻がいながら自由に不倫を楽しむエドガルと、それに応じた妹のイザベルとの不倫。

この2つが基本構造だが、シャルル・アンリの母の弟がエドガルだから、シャルルとロクサーヌとの離婚をめぐる財産処理のためにフランスを訪れたロクサーヌとイザベルの両親は2人の姉妹とともにシャルルの母スザンヌの実家を訪れる

ことになった。するとそこにはスザンヌの弟のエドガルがいるし、エドガルの妻も来ているから、話はややこしい。そのうえ、フランスの離婚に関する法律制度がややこしい。そしていつものことだが、名前がややこしいので、顔と名前が完全に一致しないから、よけいややこしい。

## エッフェル塔での大捕り物は？

アメリカから来た両親を連れてイザベルはエッフェル塔見物へと出かけたが、何と大捕り物に巻き込まれてしまった。そこでイザベルは、追い詰められた犯人のピストルを、エドガルにもらったケリーバッグに入れて、エッフェル塔の頂上から放り捨てたから、それがヒラヒラと空に舞いながら……。

何ともフランス映画的で面白い描き方だが、ただけないのが、日本人の扱い方。何とこの大捕り物に巻き込まれて、犯人逮捕の引き立て役となっているのが、ガイドに連れられた日本人のツアー客。一部タチの悪い若い日本人女性が、外国では「イエロー・キャブ」などと呼ばれているが、いくら黄色人種だからといって、何も揃いの黄色のレインコートを着せなくてもいいのでは！

## アメリカとフランスの対立(?)は深刻

イラク戦争をめぐって、アメリカとフランスが「対立」していることは世界中の周知の事実。もともとフランス人(文化)とアメリカ人(文化)とは一致するはずはなく、全く異質のものであることは歴史的に明らかな事実。というよりも、イギリスを含めた西欧諸国は、自分たちの国の歴史に誇りを持っており、新興国のアメリカがいくら大国にのし上がってきても、自分たちだけのプライドを保持していることはまちがいない。その中でも飛び抜けてプライドが高いのが、フランス。特に言語、ファッション、恋愛、料理、景観などについて、アメリカなどに絶対負けるはずはないと確信している。この映画は、まさにそんなフランスの首都パリのすばらしさをアメリカに見せつけるためにつくられたようなもの。

アメリカ人が見たら(日本人が見ても)気を悪くするような挑発的な映画。そういう意味で、アフガン戦争からイラク戦争へと続く、アメリカとフランスとの対立を考えながら観ると実に面白い。

2004(平成16)年3月30日記